

知里幸恵の文章にみられる修辞技法--アイヌの民俗的修辞による影響--

その他（別言語等）のタイトル	Rhetorical technique in the texts by Yukie Chiri: Influence by Ainu's folk-customs
著者	大喜多 紀明
雑誌名	北海道言語文化研究
巻	11
ページ	99-112
発行年	2013-03-30
URL	http://hdl.handle.net/10258/2715

知里幸恵の文章にみられる修辞技法 —アイヌの民俗的修辞による影響—

大喜多 紀明

Rhetorical technique in the texts by Yukie Chiri —Influence by Ainu's folk-customs—

Noriaki OHGITA

要旨：本稿では、アイヌ民族であり、かつ、アイヌ語日本語二重話者である知里幸恵の筆記資料に確認される交差対句を紹介している。これらの日本語文章に表出された交差対句は、アイヌの民俗的な修辞表現法による影響である。したがって、知里の日本語筆記資料は、アイヌの民俗性によって文章構造が修辞論的に変異した日本語の実例であると判断できる。

キーワード：アイヌ語 交差対句 アイヌ語日本語二重話者 民俗性

1. はじめに

現在、アイヌ語は消滅危機言語とされており、アイヌ語を母語とする人はほとんどいない。もともと、アイヌ語は、アイヌ民族における固有の言語であったのだが、明治時代以降、当時の日本政府による施策などの影響により、アイヌの言語と文化は急速に和人の言語と文化に吸収される方向へと進んだ。(上野 2011: 211-224) しかし一方では、近年、アイヌ語学習を志す人たちが増加しつつある現状もある。

一般的に、文化と言語的習慣との間には密接な関連性がある。(岡野 1997: 1-29) とりわけ、アイヌは無文字文化であるので、アイヌ民族における伝統の継承は、口承が重視された。アイヌ語やアイヌ口頭資料についての研究は、現在に至るまで多くの人たちによってなされてきた。今までの言語学的、文芸的な研究成果は、種々の論文で報告されている。

さて、アイヌ語が日本語に吸収されていく過程で、多くのアイヌ語土着話者は、結果的にアイヌ語日本語二重話者になった。しかし、バイリンガルとなった彼らも刻々と高齢化が進み、彼らを話者とする日本語の収録は緊急を要するテーマとなった。1989年からは、彼らの日本語音声の収録と分析が文部省重点領域研究のテーマとなり、村崎らによる収集と分析が行われた。(村崎 1992) さらに、小野らは、アイヌ語土着話者による

「日本語北海道方言」を収録・研究した。(小野 1992: 115-128) これらの成果は、アイヌ語が日本語に接触し吸収されていく過程を理解する上で重要な知見である。

ところで、村崎や小野らによる研究は、いずれも、言語資料の採録と、収集された資料に対して音韻・文法・語彙を分析する視座による。それに対して、筆者は、音韻・文法・語彙以外に、アイヌにおける慣習的な修辞表現法も、アイヌ語土着話者の日本語に影響を与える因子となり得ると考え、菅が文字化した、アイヌ語土着話者である萱野茂さんの北海道方言談話資料(菅 1994: 45-85)と、甲地が採録した、アイヌ伝統文化の継承者でありアイヌ語土着話者でもある杉村満さんによる日本語の会話資料(甲地 2004: 125-151)をテキストとし、これらに表出される修辞論的な特徴を調査した。その結果、二つのテキストが日本語による構文であるにもかかわらず、ネイティブのアイヌ語話者におけるアイヌ語口頭資料にしばしば見出される修辞技法である交差対句法が汎用されていることがわかった。(大喜多 2012c: 23-34) 前稿で得られた知見を敷衍し、本稿では、口頭による資料ではなく、筆記による資料について注目して、修辞論的な視点からの分析を行った。

アイヌ土着話者によるアイヌ語口頭資料は、既に、比較的多く採録されているのだが、それに比べると、彼らによる日本語筆記文書資料は決して多いとは言えない。本稿では、アイヌ民族の伝統が未だ生活の中に息づき、辛うじて保持されていたと言える大正期に記録された、アイヌ土着話者による日本語の筆記テキストとして、『アイヌ神謡集』(知里 1978)の編訳者である知里幸恵さん(以下敬称略)の文章を採り上げた。

本稿で提示した知里のテキストは日本語による筆記文書であるにもかかわらず、アイヌ語構文に汎用される交差対句が頻繁に確認された。この知見は、交差対句法がアイヌにおける民俗性や心意に起因する修辞法であるという筆者の主張を支持する事例であると同時に、本稿で採り上げたテキストが、アイヌ語が日本語に吸収されていく過程で、アイヌの民俗性によって文章構造が修辞論的に変異した日本語における筆記資料の実例であると筆者は判断した。

2. テキストについて

本稿でテキストとして採用した文書は、『銀のしずく 知里幸恵遺稿』(知里 1996)に収録されている知里幸恵の「日記」の一部である。なお、知里幸恵は、1903年(明治36年)に北海道幌別郡で生まれたアイヌ民族であり、アイヌの生活的な文化の中で育った。また、知里自身はアイヌ語日本語二重話者であり、かつ、幼いころから、祖母モナシノウクのアイヌの口承を聞かされてきた。

歴史上初めて、アイヌ民族自身によって、アイヌの口承文芸を翻訳・記録し、出版された『アイヌ神謡集』は、知里の手による。知里の生涯については、藤本の『銀のしずく 降る降る』(藤本 1991)や『知里幸恵 十七歳のウエペケレ』(藤本 2002)に書かれている。『銀のしずく 知里幸恵遺稿』に収録された「日記」は、1922年(大正11年)6月1日から7月28日に書かれた。因みに、知里の誕生は、明治政府が「北海道旧土人保護法」(1907年(平成9

年) 7月1日廃止) を制定した 1899年(明治32年)の4年後である。また、知里による文章には、「日記」の他に、『アイヌ神謡集』の「序」や、『銀のしずく 知里幸恵遺稿』に掲載された「手紙」などがある。これらの資料は、ネイティブのアイヌ民族の手による日本語の筆記文書の中でも最も古い部類であると思われる。

ところで、「序」は、明らかに、不特定の読者を対象として書かれている。また、「手紙」の場合は、知里の両親が文章を読むことを前提としている。それに対して「日記」の場合は日記という性質上、基本的には自分以外の読者を設定していない。したがって、知里にとって、より自然な構文を採取できることが期待できる。このような理由から、本稿では、知里の「日記」をテキストとして選択した。

3. 交差対句について

本稿では、例えば $A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow D \rightarrow D' \rightarrow C' \rightarrow B' \rightarrow A'$ で表示できるような、対応する語句どうしによって作られる「対」が同心円状に配列する構文を「交差対句」としている。こうした修辞技法は、「キアスムス」もしくは「交錯配向法」等、種々の呼称があるが、便宜上、本稿では「交差対句」で統一している。

4. アイヌ口頭資料にみられる交差対句の事例

本節では、実際に、アイヌにおける口頭資料に交差対句が表出している事例を紹介する。次の事例は、アイヌ民族であり土着話者である松島トミさんから大谷が採録した「クモと結婚した白キツネのウウエペケレ」(大谷 2004: 77-123) を記載する。なお、このテキストには筆者による下線と記号が施されている。

は一、その始めのな、部落がなんぼ思い出しても今のところ思い出せなくて。

は一、Aあるところに本当に美しい女が暮らしていて、神の世界で自分に相応しい相手がないような、とても評判の美しい女が暮らしていた。B神々は彼女を妻にしたいなって行くと、このように言うのであった。C「お前があのお世へ行って魚を捕って来れたなら夫にしてやる」と言っているといわれていてとても私は怒っていたのであった。その魚を捕るために行った神々があのお世へ行っても帰って来ないという噂を聞いてばかりいた私であったが、ある日、わざと土の中から私が外に飛び出る様子を見させた。その女へ私の姿を見せると「神なのか？化物なのか？このように土の中から飛び出すとは」と言って、とても驚いているのを私は見ていた。

(上田) ほ一、うーん一。

本当にそのように飛び出した。土の中から私が現れたものだから彼女はこのように言った。「私は聞きたいものだが、どんな化物なのか？神なのか？このように、あのお世へ行って魚を捕って来た者を夫にするつもりだと私は言っていたのであるが、神か、化物か、このように土の中から現れるとは？」と彼女が言ったり、思ったり本当に私は怒っていたので再び土の中に飛び込んで、あのお世へ行って魚を持って来

た。

(上田) ふーん。

また、私は飛び出して彼女のそばへ「お前が食いたがり、神々全てをお前が殺したので、彼らが帰って来ないのだから食え」と言って、それを投げた。私がそれを捨てたそばで本当に女が驚いているのを私が見たのでこんどはD彼女の目を叩いた

(上田) は、あたたた、あー、おっかない。

ので、彼女が転がった。痛くて転がっている様子を見ると今度はその家を私が燃やしたので、私がそう思わせると

(上田) ほー。

「何の神か？化物なのがお前なのか？私を痛めつけて、さらに家を燃やされた」と言いながらとても痛がって転がりながらも怒っている声を聞くと、すぐにまた地中へ飛び込んだように

(上田) ほー。

思わせてD自分の家に私が帰っていると何日かたつと本当に、ゴザ袋へ彼女が衣服を入れて背負って来た様子を私は見えても黙っていたのであったが外に彼女が立っていたが「入れ」と

(上田) ふっふ…。

D言わずにいると自分で入って、荷物を置いてそれを置いたので今度はこのように思わせた。E家の壁よりも雑草がぐんぐん伸びていたように思わせた。

(上田) はー、おっかない。

ふふふ…、Eそして炉端でその雑草の中に私が寝ているように思わせて毎日、暮らしていたところ本当にF女が雑草をむしりにむしって、外に捨てていたかのように私が思わせて

(上田) はー、おっかない。

F毎日のようにそうしていたところ、G彼女は衣類を枕にして毎日、部屋の隅で寝ていた。G´夜になるとそうしていたのを私はとても哀れに思えてきたので、F´きれいな家に、雑草のない美しい家である立派な家、大きな家に見させた。

(上田) ほーんー。

ふふふ、そして今度はE´炉端で私が横になっていると彼女が起きて、D´大きく目を見開いて

(上田) ふっふっふ…。

D´あちこちをキヨロキヨロしていたのを見ながら別に「炉端に來い」とも私は言ってもせずにかまわないで

(上田) ふーん。

D´いると、彼女が泣きながら這い這いして炉端に來たのであった。

(上田) ふーん。

そして、彼女が泣きに泣いていたので、C´「どうして、このように神の全てをあの

世へ行かせ続け、帰って来られないような悪さを続けるのなら母親と父親と一緒にあの世へ蹴落としてやるぞ」と私が言うと、なお一層泣き続けて「これからはこのような悪いことをしません」と言って彼女が謝った。

(上田) ふーん。

B´今度は彼女を哀れに思った。私が痛めつけてしまったので彼女を私の妻にした。

(上田) ふーんー。

そして、A´子供をたくさん持って暮らしていたので、(今度その、なんたけ？神様は？)

(大谷) ヤスケプ。(クモ。)

(あ、クモ。)

(大谷) ウパシチロンヌプ(白キツネ)

「クモの神よ、決してこのような悪行をするのではないぞ」と白キツネの神様が言ったのだと。

ここで、筆者が下線・記号を施した A~G、A´~G´ の箇所について、視覚的に理解しやすく配列すると次のように表記することができる。

- A 美しい女が暮らしていた
- B たくさんの神々が彼女を妻にしたい
- C 悪事をする女
- D クモが女の目を叩く クモの元に行く女
- E 炉端で寝ているクモ
- F 草むしりをする女
- G 部屋の隅で寝ている女
- G´ 哀れに思うクモ
- F´ 雑草のない美しい家
- E´ 炉端で寝ているクモ
- D´ 目を見開く女 クモの元に行く女
- C´ 悪事を謝る女
- B´ 彼女をクモの妻にする
- A´ その後の暮らし

A は、「美しい女」が生活している様子が描かれた箇所である。それに対し、A´ は、「美しい女」を「クモ」が妻とし、生活している様子である。B を見てみると、多くの「神々」が「女」を妻としたいと思っているということが書かれており、一方、B´ では、「クモ」が「女」を妻とした場面である。さらに、C には、「女」の悪事が書かれているのに対し、

Cでは、「女」が悪事を謝っている。Dには、「クモ」が「女」の目を叩く場面があるのに対し、D'では、目を見開く「女」の姿が書かれている。このテキストでは、「目」という言葉が出てくる箇所はこの2箇所しかない。また、DとD'には、共に、「女」が「クモ」に近づいていく様子が配置されている。また、E・E'は、両方ともに、「クモ」が「炉端」に寝そべっている場面である。Fでは、「女」が雑草をむしっており、それに対し、F'では、雑草のない家の様子がある。Gは、「女」が部屋の隅で衣服を枕にして寝ている場面であり、G'は、そのような姿で寝ている「女」を見て、「クモ」が哀れに思う場面である。

以上のように、テキストには、合計7対の対応による交差対句を確認することができる。なお、こうした事例は、このテキストだけに確認されるのではない。交差対句が見出されるアイヌ口頭資料の中では、上記のような構造は典型的な事例であるといえる。

筆者による以前の報文では、カムイユカラ（神謡）（大喜多 2011: 24-32）・メノコユカラ（女性の謡）・ロくらべ（早口言葉）・ウエペケレ（散文説話）（大喜多 2012a: 181-213）・挨拶口上（大喜多 2012b: 157-165）・自然会話（大喜多 2012d: 133-144）において見出される交差対句を紹介した。このように、交差対句は、口承のジャンルには依存せずに汎用される修辞技法である。また、上記のように、アイヌの自然会話にも汎用される。さらに、アイヌ土着話者の日本語においても交差対句が汎用されている事例も前項で示した。しかし、アイヌ土着話者による日本語筆記資料に確認される交差対句については今まで紹介されていない。本稿では、アイヌ土着話者による日本語筆記資料についての分析を行っている。

5. 知里幸恵による日記

本稿でテキストとした筆記資料は、1922年（大正11年）6月1日、6月2日、6月3日の日記である。この3編の日記は、『銀のしずく 知里幸恵遺稿』に収録された日記の中でも最初の3編に相当する。

5. 1. 1922年6月1日の日記

はじめに、1922年6月1日の日記を掲載する。なお、下線と記号は筆者によるものである。

大正十一年六月一日

A目がさめた時、B電燈は消えてみてあたりは仄薄暗かった。お菊さんが心地よげにすや／＼と寝息をたてゝゐた。今日は六月一日、一年十二月の中第六月目の端緒の日だ。私は思った。此の月は、此の年は、C私は一たい何を為すべきであらう……D昨日と同じに机にむかってペンを執る、白い紙に青いインクで蚯蚓の這い跡の様な文字をしるす……たゞそれだけ。たゞそれだけの事が何になるのか。E私の為、私の同族祖先の為、それから……Aコロイタクの研究とそれに連る尊い大事業をなしつゝある先生にE'少しばかりの参考の資に供す為、學術の為、日本の国の為、世界万国の為、……何といふ大きな仕事なのだらう……D'私の頭、小さいこの頭、その中にある小さいものをしぼ

り出して筆にあらはす.....たゞそれだけの事が——C´私は書かねばならぬ、知れる限りを、生の限りを、書かねばならぬ。——B´輝かしい朝——A´緑色の朝。朝食の時、中條百合子さんの文章から、術、芸と実生活、金持の人の文章に謙遜味のない事などを先生がお話しなすった。

F芸術と云ふものは絶対高尚な物で、親の為、夫の為、子の為に身を捧げるのは極低い生活だといふのが百合子さんの見解だといふ。「しかし芸術が高尚な尊い物であるのおなじく、家庭の実生活も絶対に尊い物である事にまだ気がつかないのはまだ百合子さんが若いのだ、かはいさうに.....」と先生は、G若い彼の女をいぢらしいものの様にしみ／＼と仰る。H私ハよそ事ではないと思った。胸がギクリとした。私には芸術って何だかよくはわからないが.....。

それから、百合子さんは、Iあまりに順境に育ったので、J人生は戦ひである事を知らずに物見遊山と心得てある.....といふお話もあったが、わかった様なわからない様な気がした。

K喜びも悲しみも苦しみも楽しみも、Lすべてが神様の私にあたへ給ふ事なのだ。M私に相応しくない物を神様は私にあたへ給ふ筈はない。M´だから私はあたへられる物を素直に喜んでいたゞかなければならない。L´不平、それは、神を拒否する事ではないか。

K´感謝、感謝！

J´罪を犯して罰をのがれやうとは虫のいゝ話。仕事を持ち出して奥様やおきくさんとお裁縫をする。奥様は昨夜の寝不足で今日は御気分がすぐれないとの事、I´夢さへ見ずにグッスリと寝入った私は、H´何だかしら、済まない様な気分が起った。何卒奥様に安眠があたへられます様に.....と祈らずには居られない気になった。

G´赤ちゃんが今日は大へん御きげんがよい。F´奥様の為に、先生の為に、赤ちゃん御自身の為に、坊ちゃん、おきくさんの為にも赤ちゃんの健康がほんとうに望ましい事。「弱い女が主婦になるのは罪だ。子供の為、夫の為、自分の為に最大の不幸だ」と奥様が仰る。N何たる悲痛の言葉ぞ。私は直ぐに打消して Oそれに代るよろこびの言葉を見つけようと思ったが不能であった。だって私は常日頃ちょうど奥様とおんなじ心持であたのだから.....。P奥様は最も深刻にその経験をなされたのだ。Q私は.....これから、その生活にはいらうとしてゐる。R自分の弱い事を知りつゝさうした生活に入るのは罪かしら.....。R´罪だとしたら私は何うすればよいのだらう.....。

私は申上げたい。

Q´おいとしい奥様、何うぞ安心して夫の君の愛におすがり遊ばせ。あのおやさしい美しい旦那様はあれ程貴女を愛して貴女を支えていらっしやるぢやありませんか。P´奥様は幸福でいらっしやる。旦那様の愛は即ち神様の愛、神様の力ではありますまいか、と。

O´今度少し裁縫をなさいと奥様が仰った。嬉しい事。英語が難かしくなったのが嬉しかった。N´明朝の復習がたのしみ。麗らかなみどりの日はこれで終る。

このテキストには、 $A \cdot A' \sim E \cdot E'$ 、 $F \cdot F' \sim M \cdot M'$ 、 $N \cdot N' \sim R \cdot R'$ という、合計3種類の交差対句を確認することができる。以下に、 $A \cdot A' \sim E \cdot E'$ を対応とする交差対句を紹介する。

A 目がさめた時

B 仄薄暗い

C 私は何をすべきか（使命の模索）

D 執筆（ただそれだけの事）にどれほどの価値があるのか？

E 大事業に着手する先生（小なるものと大なるものの比較）

E' 大きな仕事（小なるものと大なるものの比較）

D' 執筆（ただそれだけの事）に大きな価値がある

C' 私は書かなければならない（使命の自覚）

B' 輝かしい

A' 緑色の朝

ここで、 $A \cdot A'$ は、Aの「目がさめた時」が「朝」を表示する言葉であるので、 A' の「緑色の朝」と対応している。 B と B' は、「仄薄暗い」と「輝かしい」という正反対の意味を持つ言葉が対応している。また、 $C \cdot C'$ については、 C が「私は一たい何を為すべきであらう」という、知里自身が使命を模索する言葉が配置されているのに対し、 C' には、「私は書かねばならぬ」という言葉で、自身の使命分野についての自覚と決心が書かれている。 D には、「執筆」という作業にどれほどの価値があるかを自問する様子が書かれているのに対し、 D' には、自身の「執筆」作業の様子が書かれている。 E には「～の為」という記述の後に「先生の大事業」についての記述がある。一方の E' にも、「～の為」という記述の後に「大きな仕事」という言葉が配置されている。

続いて、 $F \cdot F' \sim M \cdot M'$ の箇所における交差対句を次に示す。

F 家族の為に生きることは良くない（百合子さんの考え）

G しみじみと話す先生

H 他人事ではないと思いきりとなる

I 順境に育った

J ～という話

K 喜び・悲しみ・苦しみ・楽しみ

L 神が与えたこと

M 私に神が与えたもの

M' 私に神が与えたもの

L' 不平は神を拒否すること

K' 感謝

- J´ 虫のいい話
- I´ 安眠している
- H´ 済まない気持ちになり祈らずにはいられない
- G´ 機嫌が良い赤ちゃん
- F´ 不健康では家族の為にならない（奥様の考え）

まず、FとF´では、「家族の為に生きること」という同じテーマについての「百合子さんの考え」と「奥様の考え」が対比されている。G・G´には、「しみじみ」と「機嫌が良い」という、「落ち着いた状態」を形容する言葉が配置されているという点で一致している。それに対し、H・H´には、「ギクリとする」と「済まない気持ち」という、他者の言動に知里の心が誘発され、自身を振り返る様子が描かれている。I・I´は、共に、順調で安定した様子についての表現である。また、J・J´は両方ともに「話」についての記述である。

Kは「喜び・悲しみ・苦しみ・楽しみ」であり、K´は「感謝」である。この両者は、心の表現という点で一致している。LとL´は、「全ては神が与えたことである」ということと、それに対して「不平を言うことは神を拒否することである」というように、表現は異なるが、意味は同じである。Mは、「神は私に必要なものを与える」ということが書かれており、一方、M´には「神が私に与えたものは素直に受け取るべきである」という意味の事柄が書かれている。Lは、L´についての「理由」である。

N・N´～R・R´については次のように表示できる。

- N 悲痛 打ち消す
- O よろこびの言葉 不能であった
- P 奥様の経験
- Q 結婚生活（私）
- R 結婚するのは罪か？
- R´ 罪ならばどうすればいいのか？
- Q´ 結婚生活（奥様）
- P´ 奥様は幸福
- O´ 嬉しいこと 難しくなった
- N´ 麗らか これで終る

NとN´については、「悲痛」（N）と「麗らか」（N´）が正反対の意味の言葉であり、「打ち消す」（N）と「これで終る」（N´）は同じような意味の言葉である。O・O´では、「よろこび」（O）と「嬉しい」（O´）という類似した言葉が対応しており、「不能である」（O）ことと「難しくなる」の意味も似ている。Pは「奥様」の経験についての記述であり、P´はそれに対してのコメントである。QとQ´では、「私」と「奥様」の「結婚生活」を対比している。RとR´は、共に、「罪」というテーマについての「疑問」である。以上のように、大正 11

年6月1日の文書は、交差対句を主軸とした構造である。

5. 2. 1922年6月2日の日記

続いて、その翌日の1922年(大正11年)6月2日に書かれた知里による文書をみってみる。以下、テキストの引用である。なお、記号・下線は筆者による。

今日もいゝお天気。朝の中は英語の復習、洗濯で時を過し、お昼飯まではシユブネシリカを書く。午後は裁縫、A読書。B十二時少し前に就寝、C手紙をやっと二枚。D此方のイアクニシパの遺稿『身も魂も』を読んだ。何といふ悲痛極る文字であらう。一字々々真紅な心臓から迸出る美しい生血で書つけられたものゝ様……。E愛とは何。彼の君が命を懸けて戦った血と涙の記録、F何うして涙なしに読む事が出来ようぞ。私にはちっとも批評などの出来る頭ぢゃない、Fたゞ／＼痛切な同情同感の涙のみ……。E真剣、私の心に真剣な愛があるか。真剣な愛を彼に捧げてゐるのか、果して。純真な美しい愛か。おゝ私は愛します。たゞ貴郎を愛します。D身も魂も打こんで……。貴郎もまた私に然うである事を私は深く／＼感ずる事が出来ます。信じます。私をも信じて下さい。

義経伝説を書いていらっしゃる先生のお顔が何だかしら青く見える。お疲れでせう、ほんとうに……。おからだにお障りの無い様に……。奥様の御心配の程が察せられる……。赤ちゃんをよほどだっこした。随分私の顔が珍しいものに赤ちゃんには見えたのでせう。動く私の口を引かいては黙って見つめていらっしゃる……。おゝかはゆい嬰子、ほんとうに不思議でせう。何処から来た新しい人だらう……。と。

C手紙を書いた。B眠かった眼が次第にさえて時のたつのを忘れて書いた。ほんとうに真純な誠をこめて……。手紙などは、ほんとうに真実がなければ書けないもの……。Aグリース神話読終る。

テキスト中の記号箇所を配列すると次のようになる。

A 読書

B 就寝

C 手紙を二枚書く

D 『身も魂も』を読む 真紅な心臓から迸出る美しい生血

E 愛とは何か?

F 涙なしに読めない

F 同情同感の涙

E 私心に真剣な愛があるか?

D 「身も魂も」打こむ 先生のお顔が何だかしら青く見える

C 手紙を書いた

B[´] 眼が冴える

A[´] 読了

A と A[´] は、「読書」と「読書の終了」が対応している。B は「就寝」であるのに対し、B[´] は、逆に、「眼が冴える」ことが書かれている。C・C[´] は、共に、「手紙を書く」ことについてである。D には、知里が『身も魂も』を読み、そこに書かれた「真紅な血」に綴られた言葉についてコメントしているのに対し、D[´] ではその「身も魂も」を比喻として知里自身の「愛」に対比させている。また、「真紅な血」とは正反対の、血の気がひいて「青」くみえる先生の姿が対比的に描かれている。E・E[´] は、深刻な、「愛」についての問いかけである。F・F[´] は、両方ともに、「涙」についての話である。このように、6月2日の手紙の場合も、交差対句を基軸とした構文である。

5. 3. 1922年6月3日の日記

次は、さらに翌日の1922年6月3日に書かれた日記である。

六月三日

A朝、チッチッチと小鳥が啼く。かはゆい声で……。B可愛ゆい子供を中にした夫と妻、何といふ幸福に満ちた生活なのであらう。美しい夫婦の愛が子といふものによって、層一層醇化され向上してゆくものなのであらう。

子といふものの若い芽を、魂をのびさせ様とするのには、父も母もほんとうに同じ心を持って心配し、努力するのではないか。頬が少しふくらんで来たといつては顔見合せて共に同じよろこびをし、少し熱がある様だと云つては二人交々愛児の頭に手をふれる……。美しい愛の姿、夫と妻の愛の姿は、二人の間の愛児によって表現されるのであらう。愛児に対する時の父母の心は、真に二つが一つに融けあつてゐるのだもの。

奥様が昨夜の寝不足でお気分が甚だ勝れぬ。だから、私も何うか頭が少し痛くなつてお苦しみをわけ持ちたいと思つた。

お湯にゆく。C自分の醜さを人に見られることを死ぬほどはづかしがる私は、何といふ虚栄者なんだらう。C[´]これでももし人並に、あるひは人以上に美しい肉体を持ってゐたら、自分以下の人に見せびらかして自分の美をほこるのであらうに。B[´]私にふさはしくないものを神様が私にあたへ給ふ事はない。私には何うしてもなくてはならぬ物かも知れない。私はあたへられた私のものを、何のはづる事があらう。神様の目からは、さういふ美醜などは何の差別もなく、みな一つのものではないか。尊い賜である肉体を醜いと云つて愧ぢてゐた私。神様に何といふ私は親不幸な子なんだらう。美しい、醜いなどといふ事を何処から割出してきめた事なんだらう。独決！ 美しくてもみにくくてもいゝではないか。みんな人間だ、みんなおなじに神の子ではないか。親の愛は美しい子にばかり偏るであらうか。否。肉体の美醜は親の愛をちつとも変らせる事はない筈だ。私はたゞ感謝する。感謝する。

A´ 単衣が出来上った。旭川のお母さんが炭一俵を買ふのをやめた其のお錢が此の単衣になったのだ.....。

上記テキストの記号箇所を配列すると次のようになる。

- A 小鳥の鳴き声がきこえる
- B 子供に対する親の愛情
- C 自分の醜さを人に見られたくない
- C´ 自分以下の人に見せびらかしたい
- B´ 私に対する神の愛
- A´ 単衣ができあがる

ここで、まず、BとB´について試みる。まずBは、父母が子供に抱く愛情について書かれている。それに対して、B´では、「神」を「親」の立場に置き、「私」を「子供」の立場に置いて、「神」が「私」に抱くべき愛情について書かれている。また、C・C´では、Cが自分の醜さを「見られたくない」とあるのに対し、C´では逆に、もし自分が人並み以上に美しかったとするならば、自分よりも醜い人に対して、自分の美しさを「見せびらかしたい」とある。ここで、A・A´については、B・B´やC・C´ほど、対比関係が明確ではないようだ。あえて言うならば、AとA´は、ともに、かわいらしい「小鳥」と「単衣」が対応しており、B・B´とC・C´がともに観念の世界における話であるのに対し、AとA´は現実の世界での話である。

6. おわりに

前節で紹介したように、知里の3編の日記には主要な修辞技法として交差対句が使用されていることがわかる。このような表現法は、4節の「クモと結婚した白キツネのウエペケレ」で例示したような、アイヌ口頭資料における典型的な交差対句である。したがって、本稿で扱ったテキストにおいては、日本語筆記資料でありながら、アイヌ語構文に確認できるものと同様、交差対句構造が主要な修辞であると判断できる。2節で述べたように、「日記」は、「手紙」や「序」とは異なり、基本的に読み手を意識した文章ではない。畢竟、本稿での知里の日本語に表出された修辞は、アイヌの民俗性によって文章構造が修辞論的に変異した日本語筆記資料の実例であると判断できる。また、このような修辞表現が表出する理由は、アイヌの民俗性もしくは心意の影響によるものと判断できよう。しかし、今となっては、アイヌの習俗の中で育ったアイヌ民族の数は少ない。したがって、知里の日本語は、アイヌ民族が日本的な風習に吸収されていく過程で現れた貴重な言語資料であると言える。

本稿の1節で筆者が書いたように、アイヌ語は消滅危惧言語とされているものの、近年においてはアイヌ語を学習する人たちも増えつつある。ここで、一般的にも言語と習俗が不可分な関係にあるように、アイヌ語においても、アイヌ語の文法や語彙、音韻について学習す

ると同時に、アイヌの習俗や心意を踏まえ、こうした習俗や心意が言語習慣に表出した、いわゆる民俗的修辞技法を学習する必要があるだろう。本稿で紹介した交差対句は、アイヌにおける民俗的修辞技法であると筆者は理解している。畢竟、アイヌの口頭資料に表出する交差対句の調査は、いわゆる「生きた」アイヌ語を学習する上で重要である。(大喜多 2012b: 157-165)

さらに本稿での考察を敷衍し、知里による「手紙」や「序」の構造を「日記」と比較することにより、筆記資料において、文書の自然さ（著者が読む対象を意識しているか否か）の度合いが修辞構造に与える影響についても調べる必要がある。

引用文献

- 知里 幸恵 (1978) 『アイヌ神謡集』, 岩波文庫
- 知里 幸恵 (1996) 『銀のしづく知里幸恵遺稿』, 草風館
- 藤本 英夫 (1991) 『銀のしづく降る降るまわりに一知里幸恵の生涯』, 草風館
- 藤本 英夫 (2002) 『知里幸恵一十七歳のウエペケレ』, 草風館
- 大喜多 紀明 (2011) 「「アイヌ神謡」の修辞パターンから心意を辿る (上) —「交差対句」を糸口として—」『西郊民俗』217号, 24-32. 西郊民俗談話会
- 大喜多 紀明 (2012a) 「アイヌ女性叙事詩「スズメの酒盛り」についての考察—交差対句と心意—」『アジア民族文化研究』11, 181-213, アジア民族文化学会
- 大喜多 紀明 (2012b) 「アイヌの挨拶表現と民俗的修辞構造」, 『ポリグロシア』, 22号, 157-165, 立命館アジア太平洋研究センター
- 大喜多 紀明 (2012c) 「アイヌ民族を話者とする日本語構文に見られる特徴」『ポリグロシア』23号, 127-138, 立命館アジア太平洋研究センター
- 大喜多 紀明 (2012d) 「アイヌの日常会話にみられる民俗的修辞」, 『比較民俗研究』, 27号, 133-144, 比較民俗研究会
- 大谷 洋一 (2004) 「〈調査報告〉松島トミさんの口承文芸6」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』10, 77-123, 北海道立アイヌ民族文化研究センター
- 岡野 哲 (1997) 「文化と文明: 「言語と文化」考 (1)」『北海学園大学人文論集』, 9号, 1-29, 北海学園大学
- 小野 米一 (1992) 「アイヌ語話者の日本語北海道方言」『学芸国語国文学』24, 115-128, 東京学芸大学
- 甲地 利恵 (2004) 「〈調査報告〉旭川地方におけるタブカラについて—杉村満さんの伝承より—」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』10, 125-151, 北海道立アイヌ民族文化研究センター
- 菅 泰雄 (1994) 「アイヌ語話者の日本語北海道方言談話資料」『北海学園大学人文論集』2, 45-85, 北海学園大学
- 村崎 恭子 (1992) 「アイヌ語日本語二重言語話者の音声の収集と研究」『日本語音声』研究報告6, 文部省重点領域研究
- 上野 昌之 (2011) 「アイヌ語の衰退と復興に関する一考察」『埼玉学園大学紀要 (人間学部篇)』11, 211-224, 埼玉学園大学

執筆者紹介

氏名：大喜多 紀明

所属：アジア民族文化学会

Email：ohkitan@yahoo.co.jp